第１９回 福岡県美しいまちづくり建築賞　受賞作品

美しいまちづくり建築賞　大賞受賞作品

住宅の部　作品名 ＴＥＲＺＥＴＴＯ（テルツェット）

建築主 福岡造船(株)

設計者 (株)スピングラス･アーキテクツ

施工者 九州建設(株)

一般建築の部　作品名 中村製紙所新社屋

建築主 (株)中村製紙所

設計者 ＳＵＥＰ．　末光弘和＋末光陽子

施工者 (株)イノウエハウジング

美しいまちづくり建築賞　優秀賞受賞作品

住宅の部　作品名 可也の廂（=かやのひさし）

建築主 山村英治 山村節子

設計者 (有)建築デザイン工房

施工者 平成建設(株)

一般建築の部　作品名 誠修高等学校９０周年記念体育館

建築主 学校法人不知火学園誠修高等学校

設計者 テツワークス 蜂谷哲夫

施工者 (株)ナカノフドー建設九州支社

財団法人福岡県建築住宅センター奨励賞

建築主 田中安広

設計者 (有)建築デザイン工房

第 19 回福岡県美しいまちづくり建築賞総評

第 19 回を迎えた福岡県美しいまちづくり表彰が、本年度から「福岡県美しいまちづくり建築賞」に制度が改定され、住宅建築と一般建築の 2 部門を対象として表彰される事になりました。その初年度である今回は、住宅の部で 41 件、一般建築の部で 35 件の応募があり、その多数に驚くと同時にそれだけ難しい選考となりました。限られた提出資料で建築作品を評論して委員会で賞を選ぶのは容易ではありません。10 名で構成する選考委員会が、最終的には多数決で選考しました。多数決は多分に凡庸な作品を選び出してしまう危険性を伴いますが、提出された写真、図面、解説を通して、建築に込められた設計の主張が、この顕彰の理念に重なって強く訴えてくる作品を見てみたいという気持ちで選ぶことができました。結果的には、大規模で立派にみえる作品よりも、建築の可能性を新しい表現によって切り開いていくことに挑戦している作品が選ばれることになりました。選出された 5 作品は、いずれも比較的小さな規模ながら、建築に求められた諸与件を丁寧に考え抜いた作品で、しかもすべて若い世代の設計者によって設計された作品でした。これらのことは偶然の巡り合わせですが、この建築賞の制度改定の有効性を感じさせるとともに、公に認められるこうした顕彰が、若い世代の設計者のみなさんの更なる建築創造の糧となっていただければ、選考委員会として望外の喜びです。

TERZETTO (テルツェット)

建築主：福岡造船(株)
設計者：(株)スピングラス･アーキテクツ
施工者：九州建設(株)

設計趣旨	講　評
港地区は都心に近いにもかかわらず、漁業関連産業の衰えに伴い、魅力の乏しいエリアだった。この港で造船業を営むクライアントは、この地区をより良くしたいと願い、そのポテンシャルを引き伸ばすきっかけとして、倉庫として使っていた敷地に集合住宅を建てることを希望した。テルツェットは、それが三重奏を意味するとおり、4m階高の低層部、2 層分の吹抜けを持つ中層部、水平方向 360 度見渡せるペントハウスの、三つの層からなっている。港を一望できるバスルームや広々としたテラスの設置など、ダイナミックな空間の魅力をつくりつつ、同じ層にも2つの住戸タイプをつくるなど、地域の特性と住空間を魅力的に結びつける工夫を積み重ねている。	都市に集まって住むための住居の多様性を示した秀作。福岡船溜りに面して、かつて造船所や倉庫などが並んでいた敷地に建つ賃貸集合住宅である。住戸構成は、ロフトタイプ、メゾネットタイプ、ペントハウスタイプと形式が異なって入り交じり、生活の場としてだけでなく、住まいと仕事場を兼ねた SOHO 的使い方なども想定しているという。生活感を消して強堅な印象を受ける打ち放しコンクリートの造形表現、港湾の風景に向かって視界を開く大きなガラス開口窓、立体的な量感のある住戸、透き通った印象のペントハウスでの自由な住まい方や使い方への挑戦など、設計者の意図が都市住人の生活感覚の表現としてよく現れている。このような都市での多様な住まい方の可能性を拓く設計の筋立ては、古くからの船溜り地域のイメージを再編成する役割を担うだけでなく、単なる集合住居であるという以上に新しいまちづくりのアイデアとして、他の集合住宅の空間計画にも刺激を与えることになるだろう。

大　賞

一般建築の部

中村製紙所新社屋

建築主：(株)中村製紙所
設計者：SUEP.
末光弘和＋末光陽子
施工者：(株)イノウエハウジング

設計趣旨	講　評
筑後平野の拡がるのどかな風景の中に建つ、老舗の製紙会社のオフィスである。この建物では、従業員が家族のようにリラックスして働くことのできる住宅のようなオフィス環境をとして、南北に抜ける大きな木のトンネルの空間を提案した。この木のトンネル空間は、四周木フローリングで包まれており、南北面で木製サッシュを全面開放することができる。そのため、北側緑地と南側の緑をつなぐ連続的な風の道を形成しており、無柱構造と高い天井、床レベルの操作によって、大らかなスケール感と一体感を同時にもたらしている。白く四角い外観から刳り貫かれた木のトンネ	住宅のような快適環境を創りたかったという老舗の製紙会社の小オフィスである。南北に抜けるトンネルのような無柱構造の二つの箱空間が積み重ねられ、2階の高さ6mの吹き抜け執務室に、2.5 階と 3 階の諸室を浮かべて回遊できるようにした構成は、オフィスの複雑な動きの中にも住宅のような親しみが確かに湧いてくる。オフィス家具も独創的で簡潔にデザインされ、働きやすい雰囲気を演出している。この会社の商品である和紙を、地場産業素材として建具に多用した手法も納得できる。さらに印象的な試みは、外壁と室内仕上げの木フローリングの隙間に空調空気

ルは、周囲の環境に溶け込みながら、地域に開かれたオフィスを作り出している。	を流すことで、輻射効果のある空調システムを作り出していることだ。小規模なオフィスだからこそ可能だと思われるこのようなアイデアのある温熱環境の提案には、身体に優しい空間を創りたいという若い設計者の意気込みが感じられる。細部の完成度には今後の期待が残るものの、地域の社会と環境の時代が求めているデザインへの挑戦をたたえたい。

優秀賞

住宅の部

可也の廂（=かやのひさし）

建築主：山村英治 山村節子
設計者：(有)建築デザイン工房
施工者：平成建設(株)

設計趣旨	講　評
志摩半島の中心、可也山の東南斜面に建つ住宅である。まず、敷地の半分の広さを持つ板が、出来るだけ水平に、低い位置で屋根として支えられる。さらにその屋根の半分ほどの広さを壁で囲って家とした。足りない面積は潔く塔状に屋根から立っている。こう	海風が吹き、冬の朝には必ず靄がかかるという志摩の古い住宅地の一角に建てられた、高齢者の暮らしを支援してくれる住宅である。敷地の半分に近い大きな軒下空間が、伝統的な日本家屋でみられた濡れ縁のある生活風景を模範にしたようにデザインされて

して家の周りに広い軒下空間をつくる一方、木造の躯体内空気を媒体とした暖房を建物下部に、また熱放出の装備を上部塔に与えた。同時に可能な限り大きな容量の空気を抱え込むことで、室内環境を偏らせないことを意図した。常に窓を開けやすい状況を持つことで、奥行き感に重点を置いた庭との区分は曖昧になり、住み手は自然にこの半屋外空間、可也の廂の下にいる時間を多く過ごすことになった。	いる。また建物は外断熱を徹底し、床下に設置された暖房設備がオンドルとなって快適さを増しているという。街なかのマンション暮らしを離れた高齢の住人が、新たに移り住む土地で、地域のコミュニティに参加して暮らすために思い描いたものが、若い設計者の心配りと行き届いたデザインの形になって現れている。このような住宅の提案は一見凡庸に見えるが、設計者の選定から始まったという建て主が一番望んでいた家造りの解答を得たことは間違いない。待ったなしの高齢社会に直面して、住宅の建て主と設計者が理解しあって智慧を出して作り上げた秀作である。

優秀賞

一般建築の部

誠修高等学校
90周年記念体育館

建築主：学校法人不知火学園誠修高等学校
設計者：テツワークス 蜂谷哲夫
施工者：(株)ナカノフドー建設九州支社

設計趣旨	講　評

創立９０周年を迎え、新しい時代の体育館として従来の使用形態にとらわれない、開放的で幅広く利用できる計画とした。アリーナ北側上部は、全面ガラススクリーンを設け、校舎との空間の流れを作り、下部は扉を開くことにより木製デッキとの一体感、さらに階段から続くグランドとの連続性を図っている。シンプルな形態で、以後建替えられる校舎を考慮しつつも、学校理念に沿ったオリジナリティのある建物を目指した。	アリーナをのぞくと、白く塗装された細くすらりとしたヒトデ型鉄骨トラスの構造体が上方から目に飛び込んできて美しい。バスケットコートがわずか１面の広さのスポーツ機能のみを方形の平面に簡潔にまとめ、ステージ機能は持ち込みの可動装置で対応している。北側全面に建てられた透明ガラススクリーンからの採光は明るく均一で、南側開口部からの風の通り抜けも、計画通り合理的で納得できる。若い設計者によってデザインされたこのアリーナからは、ローコストでありながら清楚な品のある空間の質を感じ取ることができる。しかし、アリーナの鮮やかな印象のためか、一体で隣接する附属施設の造りにわずかながらデザインの隔たりを感じた。また、敷地の設定から仕方がないことではあるが、この施設が、地域の防災拠点となるように市民に開かれている有用性を備えていてくれたら、さらに共感を得られたと思う。

（財）福岡県建築住宅センター
奨励賞

Karakoram（=カラコルム）

建築主：田中安広
設計者：(有)建築デザイン工房
施工者：大石建設(株)

設計趣旨	講　評
筑後川が耳納連山から流れ出た瞬間、筑後平野の東端にこの建物は位置している。ここにはもう市街地というものはなく、夏を水田、春を麦畑として迎える景色は山並みと直接つながっている。その景色に向かう一本の道がつくられ、それにそって二つの建築がつくられた。道は足場板を張られた壁によって形作られていて、その両側に必要な緒領域が、二間×二間のグリッドに乗った木造フレームによって設定されている。そして建物のプランはこのフレーム内でグリッドには拘束されずに描かれている。6寸勾配の大屋根によって生まれた大きな展示壁には、いわゆる欧州のペルシャ絨毯ではなく、そのオリジナル、中東の遊牧民族の伝統的な作品が掛けられる。	筑後平野の田園の敷地環境をデザインに読み込んだ小規模な作品。住宅とギャラリー店舗を一つの敷地に同時に設計することで、古い集落の路地で見られるような空隙を生み出している。農道や店舗への通路として使われるその空隙の形がつくり出す軸線は、耳納の山並みに向かって開かれ心地よい。空隙のデザインは店舗建築の内部構成にも見られる。平行に配置された足場板で造られた目隠し壁と、2 枚の木造漆喰塗り壁に方流れの屋根を架けてできる2つの空隙は、小さいひとつは半屋外の下屋空間として利用し、大きいボリュームのもうひとつは高い壁面を利用したギャラリーとなっている。ギャラリーの中央には細長いキャットウオークが浮かび、空隙のデザインがより明快な形となって現れている。木造平屋のローコスト仕様のための設計上の工夫として空隙をデザインした発想はさわやかであり、好感が持てる建築に仕上がっている。